

3. 万葉集成立の経緯

3.1 編纂までの状況

定説では7世紀後半から8世紀にかけて万葉集が編まれたとし、巻1～2に関しては持統天皇や柿本人麻呂それに元明天皇が関与し、次いで巻3～16には元正天皇、市原王、大伴家持、大伴阪上郎女らが関与し最後に家持の手で20巻として完成されたとしている。元来日本には古事記に見られるように古くから様々な歌謡が存在した（古事記の記事の年代推定は難しいが北九州に大王が現れた弥生中期と考えると大きな間違いは無かるう）

古事記の歌の事例を拾ってみると

- ① 須佐之男命が櫛名田比売に捧げた歌
- ② 大国主命が越の沼河比売に求婚した時の歌
- ③ 鶺鴒草葺不合命を生んだ豊玉比売が夫の山佐知毗古に贈った歌
- ④ 神武が大和に入る前、宇陀の兄宇迦斯を討った時宴会で一同が歌った歌
- ⑤ 倭建命が東国遠征した折、弟橘比売命が走水の海（浦賀水道）に入水して海神をなだめたが、その時彼女が歌った歌 など

このような歌が、出雲、筑紫、大和、相模ばかりでなく各地に存在したと思われるところで7世紀に筑紫朝が壊滅し、代わって大和朝が全国統一王朝となつてから（8世紀初頭）筑紫朝文書がすべて禁書とされた（元明天皇詔勅707年及び708年、元正天皇詔勅717年参照）

このため筑紫朝文書の大部分は焼却又は没収され、一部が名前と形を変えて又はごく秘密裡に保存されていた

大伴家持(718~785)は越中守、因幡守、薩摩守、相模守などを歴任し、これらの任地で多くの歌（東歌、防人歌を含む）を収集していた。自身の歌、一族の歌（父は太宰帥も勤めた旅人）は勿論更に禁書とされた九州がらみの歌の多数も保存していたと思われる（作者・場所・日時を工作して）

家持は没年の年(785)藤原種継暗殺事件に連座して官から除名、家財没収の処分を受けたが20年後、冤罪と判断されて復位（従3位）し、家財（歌集を含む）も官庫から戻されていた

3.2 記録上に見る編纂経緯

ア. 新撰万葉集 序文 菅原道真編纂 寛平5年(893)

「わが国には多くの古歌が有り、その流れを受けて万葉集が編まれたのであり、それらの歌は幾千有るか知れぬ程多量であった。中には詩でなく賦（韻律を持つ文章）でないものもあり、文の意味が分からぬものも有った。この度、勅（宇多天皇）を奉じ、これらを総輯し（勅撰歌集）又口伝の歌なども併せて、数十巻を編集（総輯増補本）した」

ここに書かれている勅撰の総輯本及び私撰の総輯増補本は現存せず、別途宮廷の歌合せから編集した「新撰万葉集上下」のみが菅家歌集として残されている

イ. 古今和歌集 仮名序文 紀貫之編纂 延喜5年(905) 「昔平城の天子（在位806~808）が

詔^{みことのり}して万葉集を撰ばせた。それから10代100年が過ぎた今、帝（醍醐天皇）から命ぜられて

万葉集に採られていない良い歌も加えて 20 巻の歌集（古今和歌集）を編んだ」

ウ、^{みなもとのしたがう}源順 家集 詞書

「天歴 5 年(951) 宣旨（村上天皇）ありて 初めて和歌撰ぶ所を梨壺（御所の内の昭陽舎）に置かせ給ふ 万葉集よみとき撰ばしめ給ふなり」

この時代になって 宮中に歌所を確立して 万葉集の訓み方の研究や追加の編纂の作業をさせたことが分かる

3.3 定説に対する異論

万葉集に関しては 江戸時代から現代に至るまで たくさんの研究書や解説書が出されているこの流れの中で 昭和年代末期に その成立をめぐる二つの異論が提示された

一つは 構成に問題有りとする 古田武彦・中小路俊逸の異論である

ア、九州人、瀬戸内人の歌がほとんど無い

イ、白村江の戦い（7世紀）で 2 万人を超える死者を出しながら この悲劇を嘆く歌が無い

ウ、歌の詠まれた状況と歌の内容が素直に対応しない場合がある など

九州文書が禁書とされた歴史がもたらした現象として問題点を指摘したのである

もう一つは 成立時期は 8 世紀ではなく 11 世紀末である とする山口博・中西進の異論である 山口の指摘する問題点を見てみよう

ア、万葉集の中に重複した歌が 4 首有る 注記に「敢えて記載」とする書き方から 当初は巻別されておらず 内容の部立て区分も整っていなかったことがわかる

イ、万葉集と古今和歌集で重複した歌が 8 首有る 古今集の第一稿が醍醐天皇から貫之に戻され 再度編纂された周到さを考えると その時点(905)での重複は有りえず 古今集成立後の追加である

ウ、巻 14 には平安時代の用語“駒”（以前は馬）や 推量助動詞“めり”が多数用いられており巻 14 全巻が 平安時代に加えられている

エ、^{いまかんがふるちゅう}今案注 は言葉遣いから記伝家（漢学者）の手になると考えられ 又単なる注でなく編輯意識も強い内容から 道真の注記と考えられる

オ、注記の中には 地名や植物についての誤りが有り 奈良時代についての知識の乏しい例があることから これらは平安時代に記されたと考えられる

カ、枕草子(1001 年頃)・源氏物語(1008 年頃)では 古万葉集として扱われている

キ、雑歌、相聞、挽歌など 部立区分に法則性が無く 又 四季区分も特定の巻だけで偏っており 編集方針が統一されていない 当初 2 巻として編まれた歌集に順次加えられた形のまま偏纂されたと考えられる

ク、20 巻万葉集としての初出は 後拾遺集序 応徳 3 年(1086)であり 次いで修理太夫藤原顕秀の古文書(1094 頃)である この頃から 万葉集に関する記録が堰を切ったように増えている